

富田守男 ファイナル風 (現場)からの

2月上旬、松本に出掛けた折、マスク不足の現場を知りたくて薬局・コンビニに立ち寄る。深刻な品薄状況は、新型肺炎や花粉症

の時期が重なる不安からだ。大量購入されたマスクがフリマサイトやオークションサイトで高額転売される現状には心が痛む。需要と供給で価格が決定される経済は否定しないが、健康・命に関わる非常事態での対応がこれで本当に良いのかの論議が求められるのではないだろうか。

3月に奈良に転居する元信州大学大学院教養特任教授・下田平裕身さんと久しぶりにお会いして、信州での最後の教えを頂く事が出来た。長野を去るに当たり、信州にアドバイスをと願うコメントを

いただいた。

「いつのまにか、八十歳という高齢にさしかかってしまった。ふと我に返り、周りを見渡してみると、自分が見知らぬ世界にボツンと一人、たえずんでいるような、孤独な不安

温かい地域社会を 育む事が求められている

を感じてしまう。ここ数十年の間に、世界は、すっかり変わってしまった。そこは、もはや自分が慣れ親しんできた世界ではないような気がする。誰もが視線も言葉も交わさず、ひたすらスマホに向か

い合っている。ニュースを見るのが、もういやだ。年離れた親がひきこもりの中年の子を育てて、若い親は子を見て、若い親はもは、家をさまよい出て、おとなの毒牙の犠牲になる。結婚して家

庭を築かず、世の中を恨み、無差別に人に襲いかかるケースも多し。昔は、あたたかく人を包み込んできた家庭という場は、ギンギンときしみを立てて崩れてきている。一体、世の中はどうなっ

ていくのだろうか。そんな人の世の移り変わりのなかで、私は、信州を想う。泰然と変わらぬアルプスの山々。森、川、泉・・・こんな美しい、ゆたかな地が他にあるだろうか。そして、そこには、人の住み続けてきた連続した歴史がある。そこは、人のつながりと温かい地域社会を育むゆたかな土壌なのだ。世の中がとどろく荒れ行く中で、信州という故郷(ふるさと)に人の拠り所と将来への希望がある」。

先生は、学問的に世界で蔓延する貧困問題を直視した研究者だ。

私が大学院生当時、社会学部の大学生と受講した「労働学」。劣悪な社会環境の中で、生きて行くための手段として人間らしく生きる

ために何かが必要か問いつつ、信州のあるべき姿なのだろうか。
(信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上)



さまざまな社会経験を有する者の可能性を訴求した教養は本当に有意義だった